独立ノート

ANNUAL
DOKURITSU note

No. 1
2011

年刊
独立ノート創刊号

■インタビュー【松樹路人】
■このひとに聞く
■つぶやき生の声！
■独立展・あのころ【前田寛治】
■地方展の活動から
■エッセイ・被災地より

独立展80
2012年
第80回展に向けて

独立美術協会小史

1930年協会 (1926-1930)

１９３０年協会展が佐伯祐三、前田寛治を中心として５度開催された。５回展は、3,000 点以上の搬入点数で好評を得、発展的に解散した。

独立美術協会設立 (1930)

１９３０年協会展が発端となり、二科会ほかの団体を超えて気鋭の作家が集まって、独立美術協会が 11 月 1 日に設立された。

第1回独立展開催 (1931)

1 月、東京府美術館で第 1 回独立展が開催された。清水登之 43 歳、鈴木保徳 39 歳、川口軌外 38 歳、小島善太郎 38 歳、児島善三郎 37 歳、中山巍 37 歳、鈴木亜夫 36 歳、里見勝蔵 35 歳、高畠達四郎 35 歳、林重義 34 歳、伊藤廉 32 歳、林武 32 歳、福沢一郎 32 歳、三岸好太郎 28 歳の 14 名が創立会員。平均年齢 35 歳という若き画家達だった。

独立展初期 (-1959)

野口 弥太郎、須田 國太郎、小林和作、海老原 喜之助、鳥海青児が会員として迎えられる。
初期の独立美術協会は、創立会員に影響を受けた若い画家達によって熱狂的に支持された。
その人気は、第 1 回展の搬入点数が、１９３０年協会最盛期の 3,058 点より多い 3,751 点の出品があり、第 2 回展で 4,853 点と、帝展（現・日展）や二科展の他団体を越える搬入点数に至り、第 3 回、第 4 回では 5,000 点を越えて行ったことでも分かる。その後、フォーヴィスムが主流であった独立展にシュルレアリスムを取り入れた福澤一郎が第 9 回に脱会すると、独立展から急激にシュルレアリスムの傾向が弱まっていった。そして、1940 年代後半から次第に画壇に広がっていった抽象絵画の勢力は、独立展にも影響を与えることになる。
やがて、この初期の会員は約 90 名となり、さらに次代の若い世代の画家達を魅了した。
この期に独立美術協会は、近代美術史に輝く画家集団として確固たる地位を築く。

独立展中期 (1960-1984)

中期では、初期の先達に強い憧れを持った才能あふれる若い作家が登場し続けて行くことになる。
1950 年代後半からの独立美術協会では抽象絵画が多く見られた。また、抽象が主流の美術界にあっても具象に自分の道を進む画家たちの存在も同時に見られた。
現在の洋画壇で中心的な活躍を続けている会員が、この頃に新会員となって注目を集め始めた。
画壇の芥川賞といわれた安井賞展には、独立所属の画家が多く入選・受賞した。その他昭和会展、安田火災美術財団奨励賞展など多くのコンクールや芸術賞で受賞してきた。また創設された文化庁芸術家在外研修員として選出された画家も多く、活躍が続くのである。
この頃の独立展の画家達は、当時無名であった才能のある若い画家達にも支持された。32 回展から 37 回展まで出品していた神田日勝（独立美術協会会友／次年 32 歳で永眠）もその一人。

1985- 現在

独立展以外の活動では、この期も様々なコンクールで受賞したり、文化庁在外研修員に選ばれる独立所属画家の輩出が続く。また、毎年 6 月を中心に銀座界隈の画廊で独立展出品者の展覧会が頻繁に開催され、美術界の話題になっている。
一方、独立展内部の作品には、抽象作品だけでなく具象作品にも半立体的な作品が現れたり、写実的な傾向の作品やコンピュータを利用した作品も増えて表現がより多様化して行った。
独立展は、こうした新しく生まれようとする優れた才能には時を選ばず評価して来た。また、『審査することは、同時に審査されること』という自覚を持って運営し、現在にいたる。
現在も創立時の精神を引き継ぎ、自由・公平で、温かい連帯感をもって、会員と前途有望な準会員、会友、出品者により毎年 10 月 国立新美術館で展覧会を開催している。2012 年には第 80 回展を迎える。

『独立ノート』創刊にあたり

独立展のガイドブックという位置付けの「note」第 1 号をお届けします。
独立展という一見、重く、ものものしい大作がひしめいている会。一体どんな集まりなんだ？
「ノート」を通じて、その中にいる画家たちの思い、ドラマ、泣き笑いを読み取って頂けたらと思います。そして「独立の人達は結構解りやすい」と感じて、親しみを持って頂けたら。それが「ノート」の第一歩となります。
はからずも東日本大震災と同じ年の出発。「note」の 10号、20号は、そのときの日本の姿にどう重なって行くのでしょうか。我々は、この手づくりの小さなnoteを持続して行きます。
実は私は独立 note 第 1 号を持っているよと、自慢して頂ける日が来るように。

事務所委員　今井信吾

《目次》

■ 独立美術協会小史 …… 表紙裏
■『独立ノート』創刊にあたり　今井信吾 …… 1
■ 私のターニングポイント　松樹路人　〈インタビュア：山本雄三〉 …… 2
■ このひとに聞く（1）　齋藤　将　〈取材：花澤洋太〉 …… 4
■ このひとに聞く（2）　松村浩之　〈取材：花澤洋太〉 …… 5
■ つぶやき生の声！　〈取材：浜松繁雄〉 …… 6
■ エッセイ「東日本大震災と」　齋藤　研 …… 8
■ エッセイ「希望の松は描けるのか」　高澤哲明 …… 9
■ 独立展・あのころ vol.1
～1930 年協会のころ・「独立との縁」前田寛治～　塚本　聰 …… 10
■ ほんとうに旨い新世界・地方展の活動から　〈レポート：高橋雅史〉 …… 11
■ 独立展からのお知らせ …… 12

協　力：愛知県美術館、茅野市美術館、鳥取県立博物館、福岡市美術館。
制　作：独立編集室・デザイン室　／　キャラクター制作：齋藤　将　／　デザイン：金井訓志
表　紙：松樹路人『描き続ける』　2010 年制作 130.3 × 130.3cm 部分

私のターニングポイント 松樹路人

取材／2011年7月31日　　インタビュア／山本雄三

今回の記念すべき創刊号のゲストは、現在、長野県の茅野市美術館で個展を開催中（7/30~8/29）の松樹路人先生にお話をお伺いすることになりました。

山本：この度は、個展開催おめでとうございます。初日を迎えられたばかりで、お忙しいスケジュールの中、お時間を作って頂きましてありがとうございます。今回は、現在、美術系の大学や専門学校に通っている学生さん、あるいは、卒業してコンクールや公募展に出品しながら制作を続けている若い世代のアーティストの方々に、【私のターニングポイント】というテーマでお話しをして頂きたいと思っています。

松樹：わかりました。私の場合、一念発起したというきっかけは二度ほどあります・・・私は子どもの頃を、北海道のオホーツクで育ちました。父は、教職についていたのですが数年で辞め、東京の博文館で『寸鉄』という哲学の雑誌編集に携わっていました。関東大震災に遭って、郷里北海道に帰り、再度教職に就くことになるのですが、東京のＮＨＫで教育について話をするほど、当時としては進歩的で評判の高い教育方針を持った教育者でした。読書家でもある父の書斎には、石川啄木、ドストエフスキー、トルストイなどの文学や哲学の難しい本がびっしりと置いてあり、その中に、モネやマネ、シスレー、セザンヌなどの画集もありました。

その頃、小学校高学年の私は、印象派の画集を見て油絵というものがどういう物かを知り、子供心に「綺麗だなぁ～」と思ったものです。それが、この世界への誘い水となったのでしょう。父の影響もあり、私は石川啄木に憧れていましたから、家では詩をつくり、学校では絵を描き、勉強なんて出来るわけもなく、厄介な子どもに育っていったようです。

自画像
40.9 x 31.8 cm
1943 年

中学は網走中学校へ進み、そこで、東京美術学校・師範科を出たばかりの美術の先生と出会いました。先生は、沖縄出身で、網走まで来るなんてよほどのロマンチストだったのでしょう。その先生が、毎週土曜日は学校に僕を残して図画教室で石膏デッサンを教えてくれました。先生は「時間になったら帰っていい」と言って教室を出て行ってしまうのですが、非常に大きな学校でしたから一人で居ると凄く心細くてね（笑）それが、中学の２年の半ばまで続いたんですよ。

ところがその頃、中国との戦争がはじまり、父は戦争反対の立場でしたから、波多野完治という教育学者に「そんな田舎に居ては危ないから東京へ来い」と言われ、家族で上京することになったのです。父は、東京の双葉女学校の付属第二小学校の校長に就任し、私は第十五中学校（現在の都立青山高校）に編入しました。そこは、みんな良く勉強をする学校で、レベルも違うし、全然追いつきませんでした。英語のテストも０点を取るもんだから、ある日、親に黙って判子を持ち出して退学届に判を押し、担任に提出したんですよ。担任がびっくりして、僕を校長の所へ連れて行ったのです。

そしたら、その校長は僕の話を聞いて、「絵描きになりたいのか。それじゃー、勉強は一切やらなくていい、そのかわりに、とにかくデッサンを一生懸命やりなさい。全部０点取っても卒業させてやる」と約束してくれました。昔は、そういう変な校長が居たのですね。だから、３年生になってから本格的に美術学校に進学する準備を始め、毎日学校の校門の前を通り過ぎて、そのまま同舟舎絵画研究所に行っていました。結果、普通は４浪～６浪するところを、４年生で美校（現・東京藝術大学）に入ることが出来ました。旧制中学は５年生まであって、４年生から受験することが許されていたのです。それが、一念発起の第一回目です。

東京美術学校在学中に、藤田嗣治先生が講演にいらしたこともあります。卒業すると、その頃はみんな文部省展（日展）や春陽展などに出品していましたが、私は出品するなら独立展だと決めていました。とにかく、新しくて鮮烈な感じがしました。当時の新聞では、岡本太郎などが所属していたアンデパンダン展などを中心に取り上げていましたが、「流行というものは流れて行くから、経営的に難しくなったらなくなることもある。これから出品を考えているのなら、その辺をよく考えて選びなさい」と、久保守 助教授が話してくれたことを今でも思い出します。

原野（牛）　130 x 162 cm　1957 年 第 25 回独立展

若い頃は正義感にかられて社会的なテーマを主に扱っていましたが、３７歳の時、悩みの末にそれまで描きためていた作品を焼くということがありました。当時は、結婚もしていましたから、妻と二人で夫婦喧嘩をしながらのことで、木枠から外してキャンバスのまま丸めていたものに灯油をかけて燃やしました。みるみるうちに火は大きくなり、あっという間に絵具だけが塊となって残りました。無言でそれを見て、竹の棒でその塊を突きながら空しい気持ちになったことを憶えています。その頃は、親子四人で四畳半と六畳の長屋に住んでおり、六畳で制作をしながら四畳半で四人が寝食をするという生活を送っていましたね。作品を置く場所が物理的にないということも、多少は影響していたのかも知れません。

この頃に、近所の方の世話でアトリエを建てる土地を求めることが出来、ささやかな楽しみですが、乳母車に子供を乗せて通い、紫色の木の実、枯れた向日葵や花々を眺めたり摘んだりして歩いたものです。外側ばかりに目を向けていたのが、だんだんと内側へ目を向けるようになってきた時期でしょうか。

タイルの静物　130 x 162 cm　1969 年 第 37 回独立展

そんな時、家の周りで集めた静物などを描いた作品【タイルの静物】【コタンクルカムイの静物】を第 37 回独立展に出品しました。この作品が評論家・植村鷹千代氏の『秋の公募展・総まくり』という週刊誌の中に紹介され、それは、半ば方向を見失いかけていた私にとってとても大きな自信となりました。この頃が、身近な生活そのものが絵になっていきました。それが、第二回目の一念発起と言えるでしょう。

当時、デッサンの講師として女子美に勤務していたのですが、同時期に武蔵美、多摩美、愛知芸大、京都芸大からもお誘いがあり、自宅から近い武蔵野美大に勤務することになりました。評論家の方は、私の作品のことを私小説だと言われます。太宰などもそうですよね。最近は、自分の内側へどんどん意識が向かっています。自分はいったい何なんだ？自分の心にあるものは？・・・そう思いながら描いた【描き続ける】を昨年の第７８回独立展に出品しました。

描き続ける　130 x 130 cm　2010 年　第 78 回独立展

山本：今までの先生のお話を伺って、私が先生から学生時代に言われた言葉を思い出します。「自分の身近な出来事やモノをテーマに描いていきなさい。そうじゃないと、リアリティーのある表現から遠くなってしまうから・・・」と。当時の私たちのように、今の若い作家に向けて一言だけ助言をして頂けるとしたら何と声を掛けて頂けますか？

松樹：そうですねぇ。好きなことを好きなようにやりなさい。誰かに影響されるのもよいでしょう。直ぐに飽きが来る。生きていれば色々なことがあるけれど、その通りに生きていけばいい・・・。独立展というところは、好きなことの出来る場所です。

山本：長時間、ありがとうございました。　[note]

松樹路人展 ／終わりなき旅
茅野市美術館
2011 年 7 月

このひとに聞く（1）　齋藤　将

PROFILE
1970　東京に生まれる
1994　独立展初出品
1996　多摩秀作美術展　佳作賞受賞
1997　TAMA うるおい美術展　大賞受賞
〃　多摩美術大学大学院美術研究科終了
2003　昭和会展　日動火災賞受賞
2005　第 73 回独立展　新人賞受賞
2006　第 74 回独立展　損保ｼﾞｬﾊﾟﾝ奨励賞受賞
2007　第 75 回独立展　独立賞受賞
2008　第 76 回独立展　会員推薦

１美術を志したきっかけ

ずっと遡れば、幼いころに絵画教室が好きで通わせてもらっていました。その程度の記憶が進学のさいに美大受験を選んだ理由の一つでありましたので、美術を志したと胸を張れるようなものはたいしてありません。まずは美大受験の為の研究所があることを知って、基礎クラスに通うことにしました。石膏デッサンとかは新鮮で楽しかったです。多浪生の雰囲気とか、現役学生の講師たちも何やら自由な大人という感じがして格好よかった。美術の憧れというより、美術系の大学なら自分の居場所を見つけられるという感じでした。結局、１年浪人して多摩美に入ることになりましたが、そこでの人との出会いで作家志望を意識するようになっていきました。

２独立展に出品した理由、メリットは？

whale plant　162 x 194cm　1994 年 第 62 回独立展

多摩美の卒業制作を終えて、他で自分の作品がどのように評価されるのか気になるところでした。そのころは今より絵画のコンクール展などが盛んで賞金もよかったから同級生や先輩たちが積極的に出品していました。感覚として公募団体展もその延長にあって詳しいことを知らなくても出品する人が多かった。自分が独立展の初出品を決めたのは絵の完成と搬入時期がちょうどよかったから。そのときは１度限りの腕試しのつもりでしたが、入選した絵が入賞したことや他大学出身の同世代の仲間ができたことなどが独立展で発表を続ける理由となりました。

３大学卒業から現在までどんな変化がありましたか？

大学院を修了してから大学で助手として働くことができましたので経済的なことで困ることはありませんでした。ただ自分の絵は忙しくてなかなか思うように描けなかったです。個展やグループ展などをしたくても、自分たちで発表の場所を探さなければならない時期でもあったし、卒業から数年で絵をあきらめる人がではじめたりして、続ける難しさを感じていました。それでも独立展で絵を発表する機会が自分にあったことは救いでした。現在は作家活動を継続できる環境にありますが、もとをたどれば独立展に出品し続けることが縁で人と繋がることができ、展示の機会も増えていったように思えます。

４将来像、今後の希望等を聞かせて下さい？

画家なので、描いた絵が収入になることが１番です。
とはいえ、絵を描くことより大切なことは生活の中で幾らでもあると思っていますので、おごらず、自分を見失わないところで何らかの目標をおくようにしたいと考えています。遠くの将来について語ると有言不実行になってしまうのでやめておきますが、制作の事でいえば、自分の世界をストレートに描くことが今はとても楽しいので浮かんだアイデアはすぐにかたちに残したいという気持ちです。自分の作品が誰かの大切なものになることを希望しています。

５影響された作品、作家はいますか？

もともと自分の絵は学生時代に宮沢賢治の童話を主題にして描いたものが出発点となっています。今の絵はテーマが少し変わってしまいましたが物語性を意識して描いているのはその影響があるからです。好きな画家はたくさんいます。ファンエイク、レンブラント、牧野邦夫、ワイエス、有元利夫、キーファー、原勝四郎、アンジェリコ、澤田哲郎、野村昭嘉、ターナー、熊谷守一、クレモニーニ、ラウシェンバーグ、ホックニー、松本俊介、ルソー、セガンティーニ、モロー、他などなど。絵が好きとか生き方に憧れるとか、もちろん影響を受けていると思います。

インタビュー：花澤洋太　[note]

おこさまパンダ
45.5 x 38 cm
2011 年

このひとに聞く（2）　松村浩之

PROFILE
1978　山口県に生まれる
2000　高知大学教育学部卒
〃　守谷育英会美術奨励作品にて守谷賞受賞
〃　独立展に初出品
2001　個展（銀座スルガ台画廊）
2002　多摩美術大学大学院終了
〃　上野の森美術館大賞展にて優秀賞受賞
2003　個展・レスポワール展（スルガ台画廊）
2004　第 72 回独立展 新人賞受賞
〃　多摩秀作美術展にて大賞受賞
2005　第 73 回独立展 佳作賞受賞
2006　第 74 回独立展 奨励賞受賞
2007　第 75 回独立展 独立賞受賞
2008　第 76 回独立展にて会員推挙

１美術を志したきっかけ

正直、勉強が得意ではありませんでした。「５」を取れる科目が唯一美術のみだったというところが、私が美術に向かおうとしたスタート地点です。
その後高校時代美術の先生と出会い、絵描きの世界を知り、憧れを覚え、美術系に進学することに決めました。

２独立展に出品した理由、メリットは？

二人 162x162cm 2000 年 第 68 回独立展

初めて会場に来て全体のパワーに圧倒されました。特に「新人室」には独特の熱気が籠っています。そこに興奮を覚えました。この会場に自分の作品を並べたい。これだけの迫力のある作品の中で、自分の絵がどう見えるのかを見てみたい。いつか「新人室」で先輩達や仲間達と競い合ってみたいと思ったのが出品した理由です。大きなメリットは、やはり切磋琢磨出来る先輩達や仲間達との出会いです。絵は一人で描くものですが、独りよがりに描いていても成長はありません。いい意味で他者と競い合うことが大事だと思います。独立展は大学を卒業した後の、もう一つの学校だと思います。
特に嬉しかったことがあります。私は 3.11 の直後に二人展を開催しました。電車も不通の箇所が多く、案内状は出したものの誰も見に来ないだろうと思っていました。しかし、そんな予想に反して、かなりの数の独立展の方達にご来廊頂きました。絵の話よりも地震の恐怖を語り合うことが多くなってしまいましたが、独立展の先輩達や仲間達との情報の共有と心の触れ合いが何より大切な宝物となりました。人と人との繋がりのありがたみを強く感じた２週間でした。

３大学卒業から現在までどんな変化がありましたか？

私は高知大学を卒業後、多摩美術大学大学院に進学してから独立展に出品し始めました。環境が大きく変化する中、作家としての道に踏み出したと言えるでしょう。現在も独立展を中心としながら個展やグループ展、コンクール等に出品し、作家として様々な経験を積み重ねているところです。制作を最優先した生活を送っていますので、経済的には楽ではありませんが精神的充実は感じています。
卒業後様々な理由から、制作から離れてしまう人も多いでしょう。もちろん絵を描くことだけが人生ではありませんが、絵描きを目指すなら描き続けるための環境を自ら作ることが重要です。独立展のように年１回の腕試しの場を設けることで、メリハリの利いた作家生活が送れると思います。

４将来像、今後の希望等を聞かせて下さい。

自画像に筋肉を纏った肉体を合わせて描いたものが私の作品です。私は鏡像の中に精神的理想像として、もう一人の自分（ドッペルゲンガー）をみます。ドッペルゲンガーの彼らも、現実の私と同様のコンプレックスと戦っています。その戦う姿が自分に力を与えてくれると共に現実とのギャップを思い知らされます。その衝撃こそが現実の自分を直視させてくれるのです。絵を描くことにより、現実の自分を直視することで、自分が強くなっていく糧となります。私にとって絵を描く行為とは、現実をより良く生きるための必然的な行為となっています。
今後も理想に追いつくべく心身ともに鍛えてゆくことで、より良い理想的世界をキャンバスに具現化してゆきたいと思っています。

５影響された作品、作家はいますか？

レンブラントです。彼ほど栄光と挫折の落差の極端な人生を送った人間も稀でしょう。特に挫折を経験した後の《自画像》に見る、弱さも強さも超越した人間の深さに魅かれ私も自画像を描くようになりました。
また『北斗の拳』や『キン肉マン』を読みながら空手の道場に通うという幼少期を過ごした私にとって、筋肉こそが男の力の象徴でした。そして、《ラオコーン》やミケランジェロの《奴隷》やロダンの《考える人》を知り、苦悩する筋肉の表現があることを知りました。私の苦悩を超越するための方法を自画像と筋肉表現に見つけました。

インタビュー：花澤洋太　[note]

行方
194 x 259 cm
2010 年
第 78 回独立展

つぶやき生の声！

今年も独立展に先立って、会員・準会員・会友・一般出品者多数が各所で展覧会を開催しました。その折の制作にかかわる発言やつぶやきを集めました。本展作品にどのように反映されているか、鑑賞の手がかりとして、また作家の人となりを知るヒントに。

●こんなにたくさんの会員の方が展覧会に足を運んでくれる独立展っていいよね。僕はずっと演劇の仕事をしています。舞台の臨場感のようなものを画面にあらわすことが出来ればと考えています。
（濱辺貞之・銀座井上画廊）

●テスタメント（遺言）今年はこのテーマでいこうと考えている。思いがけずに東日本大震災が起こる。福島第一原発の大事故。ここは約50km。
（齋藤研・埼玉GALLERY UNICORN）

●札幌芸術の森美術館での1カ月半の“竹岡羊子展”を終え、現在も心に残るのは5千人を越した来館者の数！驚きと感謝の思いで熱くなりながら、人が財産であるならば多くの人に囲まれて私は大富豪では？と夢気分です。
（竹岡羊子）

●学生の頃、都美館で松本英一郎先生の「退屈な風景」をみて強く惹かれた。僕の風景じゃないけど憧れかなぁ、昨年あたりから横構図で描いている。横にするとみんな震災のイメージになっちゃうね。
（岡田忠明・ぎゃらりいサムホール）

●幽霊花、地獄花など千以上の異名があり、花言葉も情熱・悲しい思い出・独立・想うはあなた一人、などなど様々なものがある。そんな思いをかみしめながら、3・11を経験した今、積年の彼岸花の群生を描いた。
（木津文哉・日本橋高島屋）

●家族の事故などで新作が中途になってしまいました。独立は競争が激化しているが、やっとここまできました。自分のペースで漆喰による制作を続け、オリジナリティが出てくることを願ってます。
（米富裕子・美術会館ギャラリー青鸞）

●海に行くと小石をひろう。流れついた何かをひろう。そのときは私でさえ海と陸の果て、境界をおもう。
（今井信吾・日本橋高島屋）

●A先生に中途半端と言われた。徹底して描いたら求心力みたいなものが出てきたように思う。
（田中瑞久・スルガ台画廊）

●5月連休、ボランティアで石巻に行き、被災した湊中学校から石巻中学校へ荷物を運び、浸水した家屋の床下の泥出しなどをした。腐った臭いはどこにいっても臭い。そんな臭いまで描けるか。
（伊藤裕貴・Gallery風）

●これまで木に漆喰で作品をつくっていたが、今まで使ったことのない鉄をとりいれた。鉄は錆びて腐れば土に還る。そんな循環素材を使って再生につなげたかった。それに木は制約があるが、自由に造形できる鉄は今の私には必要でした。
（島潟朝子・千葉アートスポットまつど）

●同じことを繰り返すのはあまり好きじゃないし、残すということにも無頓着です。／80周年記念展にむけての「輝け独立美術」のように、「山」とか「花」とか、他からテーマを出されるのって面白いね。
（本田希枝・日本橋高島屋）

●年の初めは雪の花を描きます。小さな作品で大きなヒントを得ることがあるということが分かった。
（吉永朋子・コバヤシ画廊）

●犬のことを熟知している家人の、さりげない一言「うん？これはちょっと」は鋭く、「ここいいね」は利く。
（島羽祐二・あかね画廊）

●「この路線で頑張ろう」と言われたけれど、自分自身がドキドキしなくなった。こんな時じゃないと変われないと思って。
（大嶌幹・ギャラリーセイコウドウ）

●DM用に作品をプリントアウトしたら、何故か画面が大きく切れて出てきた。あっ！これいい！と思って、、、
（乙部久子・Gallery風）

●なまずに似た魚「ポリプテルス」は今もアフリカに生息し、湖が干上がっても水を求めて胸ビレで（肺呼吸）歩いていく生命力の強い古代魚です。童画風のせいか、技術力の無さか、作品からメッセージはあまり伝わって来ない、という生の声がありました。
（平育子・あかね画廊）

●父が撮った昭和30年代の写真がたくさん残っていて、それを使いたいと。私の兄はお菓子の半分を自分で取り、残りを弟たちで分けた。新しい自転車は兄の、私はお下がりの三輪車でした。
（犬童二郎・銀座井上画廊）

●今年は、どうしても明るい色を使いたい、ほも誤魔化さず描きたい。
（川邊りえ・銀座井上画廊）

●独立は絵に対して純粋！絵を通して人間関係が出来ていく！今まで所属していた会だと、お金がからんだり、、、
（白井宏治・新潟NSTギャラリー）

●I先生から「おばあさんの顔はいい顔ではないなー！普遍的な共感の持てる顔を目指したほうがいいのでは？」というお言葉。実母がモデルだけに、ウーム！やはりそういうものを目指すべきかと考えはじめました。
（松浦孝彦・銀座井上画廊）

●S先生にここの青い矩形がなければ入選しなかったかも、と言われた（臼井茂夫・新潟NSTギャラリー）

●何を描きたいかを知るために描いているのかも。ゆっくり大人になっているなぁ、と感じます。
（藤井翠・ギャラリー絵夢）

●自分のなかに浮遊しているモヤモヤと言葉にならないものを核に構成しています。次の作品を見てみたいと思っていただけるような新鮮な構成・手法を考えなければと思い至りました。
（上田英子・あかね画廊）

●やはり私は白にこだわる、白に魅せられる。周りが大事。なんでもないところに一番時間がかかる。塗ったりとったりしながら、確固とした面をつくりたい。
（松樹路人・茅野市美術館）

●加計呂麻島に生徒を連れて合宿に行く。とにかく美しい。カメがいる、ちぬがいる、猪もいる。
（井上伸久・銀座井上画廊）

●頑張って描いてきたら悩みが多くなった。視野が広がり、欲が出てきて、思ったものが描けなくなった。
（田辺喜代子・ギャラリー絵夢）

●千年に1度と言われるほどの東日本大震災、被災された方々の労苦に思いをはせ、彼岸に行かれた方々に祈りをささげたい。今年はいつもの夏とは異なる。それぞれの立場で一層奮起しなければならない。
（絹谷幸二・日本橋高島屋）

●H先生は「これができるのに、大きな作品になるとどうしてこうなるの！」と言われた。絵を立てて描くとついつい描いてしまう、顔も手も服の皺までも。
（デュボア康子・ぎゃらりいサムホール）

●ドラッカーを勉強したら、自分をマネジメントしなければと思い至った。昔は自分が一番だと思っていたが、、、／構図は決まった、どこまで色彩をもってくるか、、、
（増田典彦・スルガ台画廊）

●芋に見えますか!?これは鯉なんですが！ナイロビにはこんな鯉が在来種の小さな魚を食っとるんです。そうです、これ小っさいけど山なんです。
（岩田真人・ギャラリー絵夢）

★作品発表したら、独立展ホームページの「つぶやきコーナー」から、いろいろ生の声を送ってネ。おまちしてま〜す。

エッセイ

東日本大震災と

齋藤　研

さきごろ、町の総合体育館で行われた町主催の合同慰霊祭では、遺族が持ち寄った思い思いの小さな額縁に入った家族が祭壇にずらっと並んだ。津波で亡くなった人、行方不明者の遺影が 100 人ほど、子供もいる、大人もいる、屈強の若者もいる。

若い頃に聞いた関東大震災の体験談、生き残った乗組員による戦艦大和最期のドキュメント、チェルノブイリの原発事故など、さいわいこれまで、自分が直接かかわらなかったそんなできごとが、今回、自分の身近で起こった大震災との遭遇で、実は、自分が生きていることと、死んでしまうことは背中合わせ、津波で流されて死んだ人も、今、自分が生きているのも、まったくの偶然のことだったのだと実感する。特別の計らいがあって自分だけは大丈夫などという保障は一切ないのだということにあらためて気付かされる。だからこの世は恐ろしいだの、悲しいだのという感情はともなわず、起こったことを事実として認識する。

私の住む新地町は、原発事故の福島第一原発から北に約 50 ｋｍ、宮城県との県境、人口は 9000 人弱、その人口が年々、70 人の割合で減り続けている、、、福島県の太平洋岸、北の端の小さな町である。南北にのびる海岸線の昔からの集落は 3 月 11 日の津波で壊滅。集落の町並みは土台だけになってしまった。道路を覆う瓦礫は自衛隊が片付けてくれたが、目印のなくなった地域で、今、自分の立っているところがどこか分からない。友人宅のところ、コンビニのあったところも、まるっきり見当がつかない。もぬけの空になって残るコンクリートの建物は、突然現れたもののようにも見える。集落の中ではこれまで、気付かなかったからである。「汝ら立ち返りて静かにせば救いを得、穏やかにして寄り頼まば力をうべし」とは旧約聖書イザヤ書の言葉である。ピンチの人にそんな説教をしても聞く耳は持たないものだという意味のことを、古のユダヤの賢者は書き添えている。

近ごろ読んだ本に「人生とは悲しきもの、だから人は泣きながら生まれてくる」とあった。ナルホドネと感心していたら、その後すぐに聞いた話で「キューバ人は笑いながら生まれてくる」とのこと。さすがに、マンボとチャチャチャを生んだ国、同じ人生ならそういう方が（健康にも）よい。

自分にとって何がよかったといって、健康で、“絵描きであること”以上のことは考えられない。大統領も総理大臣も、ご本人が強く望んで、なられたことだろうに、傍から見る限り長嘆息してごくろうさまというばかり、話に聞けば、お金持ちは、そのお金が心配で夜も眠れないトカ。

絵描きったって、ヘボじゃないかというムキもおありでしょうが、余計なお世話。私は好きでやっているのです。なにがよいのかと言えば、絶望的な日々も、何とか遣り過ごしさえすれば、、、どんなに疲れても、一晩よく眠れば、絵描きならまた、描こうという元気が湧いてくる。描くと言うことは生きるということ。“陽はまた昇る”のだ。

（ＴＶで）ハーバード大学の哲学の先生の講義を聞いた。カントのお話だった。「商店がお釣りをごまかさない」のも、人が示す善意も、評判を計算しての行為ならば、他律ということであって、（あたりまえという価値はあるにせよ）“自由”とはいえない。 すべて、“計算”からスタートしたことは“自律”とはいえない。私の理解のことだから、我ながら頼りない話なのだが、問題はこれからです。絵描きに湧いてくる“描こうという元気”の最初の一瞬は、計算からスタートするものでは、、、、ない。ここで少々動揺するとしても、

限りなく自然発生的なもの、とすれば、えかきとは、カントのいう真の意味での“自由”な、仕事じゃないの？と、いいたいのだが、取りついてみると難しい。勘違いじゃないとは思いたいけれど、言いたいことは伝わらないでしょう。まあ、いいか。とにかくこの世（絵の世界）には、強力な先輩がいて、仲間は、やさしい。

（くじけながらも）生きる元気が湧いてきます。

[note]

エッセイ

希望の松は描けるのか

高澤哲明

郷里の陸前高田の町が消えた。あまりの出来事に言葉を失い現実感の無いまま数日が過ぎた。なぜか涙は出て来ない。悲しいと言う感情が湧いて来ないのである。やっとの思いで現地入りして惨状を目の当たりにしても、同級生数人が犠牲になったことを知っても何故か涙が出て来ない。身を守る術なのか、何か鎧のようなものに身が包まれてしまったようだ。しばらくそうしているうちに、多くを失っても笑みを浮かべて前を向く老人や、社屋を失っても新入社員を迎える会社、変わり果てた母親を最後の親孝行が出来ると嬉しそうに引き取る若者の姿を見ていて突然堰を切ったように涙が溢れ出した。急造の脆い鎧の隙間と言う隙間から止めどなく涙が溢れ続ける。苦境に立たされても負けない姿を見るとどうにも涙が止まらない。どうやら泣くということのシステムが随分と変わってしまったようだ。

陸前高田の景勝地であった高田松原。2 キロに渡る砂浜に沿って立ち並んだ約 6 万本の松がなぎ倒された。その中でたった一本だけユースホステルの建物に守られるようにして残った松がある。その松を人々は災害に負けない強い意志の象徴として希望の松と名付けた。松を見上げて勇気をもらい帰って行く人、跪いて祈る人、塩の影響から守ろうと必死にメンテナンスを続ける人。この松を描いてみたいと思った。と言うよりこの松を描くことで何かが得られるのではと考えた。そうは言っても何の変哲も無い一本の松の木である。現地で 2 ～ 3 枚写生したところでどうにもなりそうもない。開き直ってこの松を単に糸口として自分の表現スタイルという工場で製材してしまうことにどれだけの意味があるだろうか。被災地出身ですと許可証をちらつかせ、松を描くことでわずかな支援活動に留まってしまっていることへの後ろめたさから救われる免罪符を得ようということか。そもそも本当に描きたいのか。想いが堂々巡りしてまた振り出しに戻ってしまう。ふと松を見上げれば、あずかり知らんといった体で立っているだけ・・・。ここに集まるのは訪れる人々それぞれの希望。何に希望を見いだして何を希望として今を生きるか。希望を思い描くということ。そんなことが心に浮かんできた。

希望の松は描けるのか、意地になってエアコンを付けずに暑さに身を委ねながら今日も自問自答を繰り返す。松はと言えば茶色くなった葉の間から少しづつ緑が戻り始め悠然と今も立ち続けている。

[note]

独立展・あのころ　vol.1

～1930年協会のころ・「独立との縁」前田寛治～

塚本　聰

かつて「前寛ばり」という作風が若い画家たちの間で流行ったという。それは古典的な構図をとり、荒々しい筆致のフォーヴィスム的画風のもので、前田寛治の画風を真似たものであった。

『自画像』部分 1928年 鳥取県立博物館

前田寛治(1896-1930)：鳥取県生まれ。1921年、東京美術学校卒業。1922-1925年、渡仏してクールベの写実主義を研究。1926年、独立美術協会の前身でもある「1930年協会」を結成。前田写実研究所を開設する。1929年、病室でも加筆した『海』が帝国美術院賞を受賞する。1930年、病のため没する。享年33歳。帰国後僅か4年半の活躍は目覚しく、新時代を告げる旗手として栄光の階段を駆け上って行った。

■青年期の寛治は詩を愛し、徳冨蘆花「風景画家コロオ」で絵を志し、ゴッホに影響された。その後、キリスト教に傾倒した。1921年1月、池袋に転居した頃を「池袋シンフォニー」と呼び、ここで後の1930年協会の主な会員らと出会った。同年末、萬鉄五郎主催の円鳥会の初会合で、後の独立美術協会主要メンバーと顔を合わせた。第1回円鳥会（SF作家の星新一の父が創業した星製薬会社が会場）へは、パリから出品した。寛治は、佐伯祐三らの仲間を「パリの豚児たち」と名付け、多くの時間を共に過ごした。この頃は、社会主義への接近と絵画理論の研究時期でもあった。

■色黒の寛治は外出の時、茶色いフランス仕立の背広を着て、その胸ポケットには白いハンカチを覗かせ、ズボン にきちんと折目を付けていた。髪は水で綺麗に撫で整え、いつもステッキを持ち、大股の早歩きだった。待ち合わせ時間に正確で、常に小さな手帖を携帯して、知人の住所や用件等を細かくメモする几帳面な性格であった。

■寛治は、里見勝蔵の案内でオーヴェール村を何度か訪れている。画家のヴラマンク邸や医師のガシェ邸を訪問し、セザンヌやゴッホが描いた場所等を見て回った。ゴッホの墓を訪れた時、尊敬する彼の人生を考え感無量になり、墓の近くの紅い花を1本摘んで帰路に着く。その夜、パリのアトリエで、墓石の印象を一気に仕上げた。その時、花弁の1枚を草原の青い絵具の中に塗り込めた。それから5,6年経った頃、作品の花弁を埋めた部分を撫でまわしながら、しばし感慨に浸っている。

横臥裸婦　97.0 × 162.0 cm　1928年（昭和3年）　鳥取県立博物館所蔵

■帰国後、裸婦の作品も数多く試みており、当時、音大生の淡谷のり子をモデルにした絵も何点か見られる。

■第2回1930年協会展に向けて、他団体から独立すべきとの意見に寛治は、《帝展（注）を出る気はない。》(1)と答えている。また、独立美術協会創立に際し、《帝展をやめる決心をしていた》(2)とある。果たして寛治が生きていたら、独立展との縁はあったのだろうか。何れにせよ、「俺が50になったときの絵を観ろ」と語った寛治は、鉄斎や南画に興味を持っていたというが、この後、新展開を遂げて行ったであろう作品の数々を是非とも見たかった。

『棟梁の家族』　131.0 × 162.5 cm　1928（昭和3）年　鳥取県立博物館所蔵

■「絵には詩が必要です」「絵には不思議な部分が必要です」…寛治の放った言葉達を、今では鬼籍に入られた独立会員の講評に聞き、深く同意した。思い起こせば、私自身何度かこれらを講評中に使ったことがある。そういう意味では、諸先輩画家の言葉と共に、寛治は今でも私の中に、そして独立美術協会の中に生き続けている。『二人の労働者』や『棟梁の家族』に接した衝撃が、私の中で全く色褪せていないのと同様に。　[note]

（注）：帝展＝現・日展のこと。

主要参考文献：

・『前田寛治』瀧 悌三著 日動出版 昭和52年 (1)。

・『前田寛治研究』外山卯三郎著 建設社 昭和24年 (2)。

・『写実の要件』前田寛治著 中央公論美術出版（新装普及版）平成11年。

・展覧会図録 1930年協会 独立美術協会による『近代絵画の歩み』朝日新聞社発行 昭和58年。他

★ほんとうに旨い新世界★

高橋雅史

「新世界といいますと大阪在住の「安うてうまいもん好き」の人以外は何となく昼間からお酒を飲んだオジサマやオニーサマ、ちょっとイカシタお姉様達がふきだまっているコワ～い大阪の中でもとりわけディープな場所…といった誤解も随分無くなってきましたが（ほんまにヤバいところは別にあります）実際にお店に入って何かを食べて…をした事ある人は案外と関西人と言われているの方々に少なかったりします。大阪にわざわざやってきた人たちの方がガイド本片手に気合いを入れて行ったりしてるところが不思議な感じもするんですがそんな好奇心旺盛な若い人らにもオススメの一品をちょっとだけご紹介します。

★幻のシチュウー★

大阪市立美術館からごく近所にある新世界じゃんじゃん横丁。串カツ屋が超人気の老舗から若い人ら向け新しいの店まで沢山ならんでおります。創業80年以上の老舗や普通の時間に行ったら先ず間違いなく入るのに並ばされる串カツの銘店の中、ひときわ異彩を放っていた「シチュウー」を看板メニューにした「いづみ食堂」というめし屋がありました。残念ながら時代の流れとご家族の都合のため最近に店を畳まれてしまいました。そんな「シチュウー」と同じ起源を持つ「シチュー」を食べられる店が「大衆食堂あづま」（創業50年くらい）です。更に粉モノ文化とのコラボレーション「シチュウーうどん」というおすすめの一品があります。クリームシチューにうどんが入っているようなぞんざいな代物でなく濃厚な牛のスープをベースに組み立ててあります。豪快に切り分けられたジャガイモとタマネギ、その上「肉」が割としっかり入っております。そこから出てくる優し～い味にお好みに応じ粉山椒をぱぱっとかけ…大阪の古の洋食文化を偲ぶ事が出来る逸品です。お値段450えん。

★新世界ですっぽんを食う★

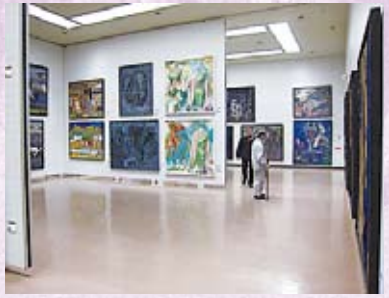
新世界の通りに高級食材スッポンのホイと入った水槽をどーんと出していて、まるまる一匹8500円から潰してくれるのが「やまと屋グループ」。スッポンには一人鍋もあって普段2500円なんですが、セールとかで運が良ければ安くで食べられるかも。その他柳川（どじょう鍋）500円、穴子箱寿司500円など。セントラルキッチン方式とは正反対の人間が握ってくれる寿司一つひとつにも温かみをかんじられます。

◎新世界の食堂では怖がらんと是非食堂のおばちゃんに声をかけてみましょう。失礼さえなければどうでもいい話にもたいがい気さくに答えてくれはります。当然味も良いんですが食事時間がよりに温かみのある物になります。こういった会話ひとつも大阪の大切な文化の一部なんですね。

■地方展の活動から

関西地方における独立美術協会の活動としては、まず大阪と京都における巡回展開催です。また各府県では、大阪独立展・独立京都作家展・独立京都春季展・和歌山独立展・兵庫独立展などを開催し、出品者相互の研鑽の場としています。さらに会員による審査もある公募の「関西独立展」があります。関西独立展は大阪市立美術館に於いて毎年3月末から4月にかけて開催し、来年で49回展を迎えます。関西2府4県のほか四国・中国・山陰地方からの出品があり、独立展に入選歴がなくとも出品可能なため、多くの方々に独立展出品の足がかりとして長く利用されてきました。関西独立賞・奨励賞・新人賞の 賞を設け受賞者の中から独立展での受賞へつながるような作品に発展していった例も少なくありません。関西地方在住で独立展出品を考えて居られる方は是非挑戦される事をお勧めします。

【お問い合せ】関西独立美術事務所・廣田 政生
（〒610-1104　京都市西京区大枝中山町1-293）　[note]



独立展からのおしらせ

独立オリジナルグッズ

独立展では、便利でオシャレなグッズを作りました。しっかりした素材を使った逸品です。価格もお求めやすく設定しました。この機会にいかがですか？

パワフルTシャツ 2種(各200枚)

奥谷博会員の書をデザインした特製Tシャツ。5.6oz綿100%のヘビーウェイトTシャツです。

8Fキャンバスバッグ（200個）

奥谷博会員の書をデザイン。8号Fが入る便利な特製キャンバスバッグ。厚地8号帆布使用、40x50x7cm。

（表）

（裏）

クリアファイル

独立美術協会会員134名の自画像を載せた記念クリアファイル。

幸せの黄色い独立ハンカチ

お肌にも目にもやさしい黄色いハンカチ。なぜか幸せも呼んでくれそう。

携帯拭きストラップ

汗や油が着いた携帯電話やメガネを、スッキリきれいに拭くすぐれもの。携帯に付ければ可愛いストラップ。

第79回 独立展
（2011年10月 / 国立新美術館）

イベント情報

12 — 16
10:00 — 18:00　東日本大震災被災者支援 チャリティ展
16日（日）17:00 抽選

12 水
13:00　表彰式（3階講堂・入場無料）
14:30　批評会（各展示室）
2階・3階のそれぞれの展示室
18:00　懇親会（東京會舘）

14 金
18:30（入場無料）　第1回 ギャラリーコンサート
叶澤尚子／ビオラ、バイオリン
加藤　梓／キーボード

15 土
14:30　第1回 ギャラリートーク
水沢　勉／神奈川県立近代美術館館長
浜松繁雄／司会

16 日
13:30　第2回 ギャラリートーク
齋藤 研／今井信吾／吉武研司
17:00　チャリティ展 抽選

21 金
18:30（入場無料）　第2回 ギャラリーコンサート
澄　淳子／ジャズヴォーカル
永塚博之／ベース
吉見征樹／タブラ

22 土
13:30　第3回 ギャラリートーク
武田　厚／美術評論家
金井訓志／司会

23 日
13:30　第4回 ギャラリートーク
本田希枝／廣田政生／高澤哲明

第79回展の地方展／特別展案内（会期等変更もございます。詳細はHPでご確認下さい。）

大阪展
2011年11月15日(火)ー11月20日(日)
大阪市立美術館／天王寺区茶臼山町1-82

京都展
2011年11月26日(土)ー12月4日(日)
京都市美術館／左京区岡崎円勝寺町124

名古屋展
2012年3月27日(火)ー4月1日(日)
愛知県美術館／名古屋市東区東桜1-13-2

鹿児島展
2012年4月28日(土)ー5月6日(日)
鹿児島県歴史資料センター 黎明館
鹿児島市城山町7-2

福岡展
2012年5月15日(火)ー5月20日(日)
福岡市美術館／中央区大濠公園1-6

2012 独立春季新人選抜展
2012年4月1日(日)ー6日(金)
東京都美術館／東京都台東区上野公園8-36
第79回独立展で入選した準会員を除く出品者の中から、独立会員の投票によって選抜された作家たちの作品展です。

第3回 輝け独立美術
2012年6月中旬予定
日本橋三越本店／東京都中央区日本橋室町1-4-1
独立美術協会80回記念展に向けての独立会員の展覧会。全出品者による集合作品が話題です。

【編集後記】

企画段階での無理難題を何とか熟し、更にレイアウトも大変だったことでしょうが、編集室とデザイン室諸氏の凄まじいエネルギーの渦から『独立ノート』が産声を上げました。ご協力頂いた方々に御礼申し上げます。準備期間も短い中でどんどん形を現して行く姿は、作品の制作過程を早回しで見ているようでした。そして今、まだ真っ白いキャンバスを見つつ、「このエネルギーと集中力と独立魂があれば大丈夫、描ける さ」と、小さく独言を言う私。　塚本　聰

【独立編集室】
大泉佳広／高澤哲明／高橋雅史／塚本　聰／花澤洋太／松村浩之／山本雄三

【独立デザイン室】
大久保宏美／大場再生／奥谷太一／金井訓志／中嶋　明／浜松繁雄／早矢仕素子／廣田政生

[note]

独立で輝いてみませんか？

80th

独立展

2012年10月17日(水)-29日(月)

国立新美術館／東京都港区六本木 7-22-2

搬入日：10月4日(木)・5日(金)

詳しくは
独立展の
ホームページ
まで！

http://www.dokuritsuten.com

2012

第80回記念展

作品募集

独立展80

独立ノート第1号

発行日／2011年10月12日

印　刷／朝日印刷工業株式会社

発行者／独立美術協会

〒141-0031

東京都品川区西五反田 2-13-8-507

Tel. 03-3490-5881　Fax. 03-6420-0026

E-mail. dokuritsu@ceres.ocn.ne.jp

URL. http://www.dokuritsuten.com